

第11回日本公衆衛生看護学会学術集会に参加して (仙台市国際センター)

結核研究所対策支援部

保健看護学科長 座間 智子

今回の学術集会は、2022年12月17～18日に開催地である仙台よりオンラインとの同時配信で行われました。テーマは、「ポストコロナ社会における公衆衛生看護への期待～新たなコミュニティケアシステムの創出～」があげられました。2019年以降、新型コロナウイルス感染症のパンデミックは個人間や地域間の健康格差に影響を及ぼし、従来の健康課題の増悪が進みました。また、社会に取り残される社会的孤立者の増加やコミュニケーションの変化から発生するあらたな健康課題への対応が必要とされています。今回の集会では、ポストコロナ社会で起こる多様な健康課題の解決に向け、どのように公衆衛生看護を展開できるかを蓄積された知見の共有や、ワークショップ等を通じて議論が深まることが期待されています。

メインプログラムは、学術集会長の宮城大学安齋由貴子教授から「ポストコロナ社会における公衆衛生看護への期待」の講演がありました。また、健康危機管理セミナーとして「これからのパンデミック対策～COVID-19パンデミックの経験から～」と題して、東北大学押谷仁教授より講演がありました。このセッションでの興味深い内容として、健康危機管理の基本は、いかに想定外の事態に対応できる体制を構築できるか、日本の地域のレジリエンスを支えているのは地域のネットワークであることが強調されました。また、クラスター抑制のためには、第一線で積極的疫学調査を実施する保健師の役割の重要性が示されていました。さらに、リスクアセスメントに基づくリスクマネージメントを実施することが今後の課題であると結ばれています。

また、「公衆衛生活動における健康危機管理の仕組みづくりとマネジメント」（自治医科大学春山早苗教授）の講演では、保健所におけるCOVID-19の経験を調査し、今後のパンデミックに備えるサージキャパシティ（健康危機の発生に伴い生じる急激で長期化する需要の高まりへの対応力）への対応計画が示されまし

た。平時より、各職種の役割公衆衛生活動を基盤とした人材育成等への備えと地域の基盤づくりが必要とされることが紹介されていました。

一般演題は、35群あり、感染症保健（A・B）については、結核に関する演題が4題、新型コロナウイルス感染症に関する演題は9題でした。本研究所からは以下の2題発表しました。

- ・「在日ネパール人における結核診断時の理解と受容について」（永田容子・座間智子）
- ・「外国人結核患者を支援する通訳者は何をしているのか—通訳者の結核療養支援の可視化の試み（第二報）—」（座間智子・永田容子）

第12回学術集会は、2024年1月に福岡で開催されます。COVID-19の動向を見据えつつ、公衆衛生看護がどのような展開に向かうのか、具体的な知見、事例が示されることを期待しています。🐼

第11回日本公衆衛生看護学会学術集会

ポストコロナ 社会における 公衆衛生看護 への期待

新たなコミュニティケア
システムの創出

2022 12.17 SAT → 18 SUN

会場 仙台国際センター + オンライン 同時開催

学術集会長 安齋由貴子
宮城大学看護学群教授

学術集会副会長 只野里子
宮城県保健福祉部 /
全国保健師長会宮城県支部

学会キービジュアル